
書 評・紹 介

Stanley K. Smith, Jeff Tayman and David A. Swanson

A Practitioner's Guide to State and Local Population Projections

Springer Netherlands, 2013, 411pp.

本書は Springer 社の Demographic Methods and Population Analysis シリーズの 1 冊で、2001 年に Kluwer Academic から出版された *State and Local Population Projections: Methodology and Analysis* の改訂版である。

私事で恐縮だが、本書の旧版を社人研に入所後間もない頃、当時人口構造研究部長であった西岡八郎氏から手渡され、しっかり勉強するようご教示いただいた。400ページ超に及ぶ旧版は本棚でもそれなりの威圧感を持っているが、一貫して簡潔明瞭な文章で記述されていることから、英語に難を抱え、かつ人口学を本格的に学び始めたばかりの評者にとって格好の書であった。以来今日に至るまで、業務として地域別将来人口推計に携わる上で最も役立っている本の 1 冊である（旧版の書評は本誌第 59 巻第 4 号に小池司朗氏が執筆）。

そうした個人的な思い入れのある旧版が改訂されたのが本書であり、簡潔明瞭な文章はそのままに、最新の知見も盛り込まれ、論点がより一層整理されたものとなっている。地域別将来人口推計の研究や実務を担う人にとっては十分すぎるほどの内容であろう。

本書の構成は、大きくは 4 つのパートに分かれている。

まず 1 章から 6 章では、人口学の基礎について解説している。人口静態と人口動態について地域別将来人口推計に特有の論点も盛り込みながら丁寧に説明し、両者がコーホート要因法では整合的に取り扱われることについて論じている。

次に 7 章から 11 章では、推計モデルについて説明している。コーホート要因法に重点が置かれ、具体的な推計計算の事例を提示している点は読者にとって特に有意義であろう。もちろんコーホート要因法以外の推計モデルについても詳しく紹介している他、特定の地域（軍や大学、矯正施設が立地する地域）や属性（学校入学者や労働力、世帯）の将来推計の方法、部分地域と全体地域で整合的な将来推計人口を得るための考え方等の実用的な論点についても言及している。

さらに 12 章と 13 章では、将来人口推計の評価と精度について論じている。12 章では、将来人口推計について 9 つの評価軸（求められた属性別人口は推計できているのか／方法やデータは妥当なのか／推計に要するコストは適切なのか等々）を提示し、個々の評価軸のみならず複数の評価軸の相対的な関係性についても丁寧に整理している。また 13 章では、将来人口推計の精度について実証的に整理し、将来人口推計には一定の不確かさが含まれることを提示している。この 2 つの章は、将来人口推計という道具の背後にある哲学を理解する上で非常に示唆に富んでおり、本書の重要な貢献の 1 つであると考えられる。

最後に 14 章では、将来人口推計の実務の流れについて説明している。ここで目を引くのは、将来人口推計を公表する前に関係者に対してきちんと説明をし、推計方法を文書化することの重要性を指摘している点である。

旧版に無かった用語集が加えられ、引用文献が章ごとに整理されるなど読者の利便性も向上した本書は、人口学の研究者はもちろんのこと実務家や他分野の研究者にも強く推薦したい一冊である。

(山内昌和)